

干拓問題歴史的検証を

干拓でできた土地に育ち、干拓の厳しさを見てきた者が今、諫早干拓問題について提言をすべきではなかろうか。それに自分がふさわしいとは思わぬが、子どものときから垣間見てきた経験から感じることはある。

過去の干拓は、自然の海退作用をできるだけ利用し、自然を大きく壊さぬ形でなされた。だから、干拓地は堤防一つ隔てて常に海水と接しており、堤防決壊や潮風の危機と隣り合わせの新地であった。農業用水の確保は自ら解決すべきことであり、自然と闘い、自然と共存していく干拓魂が出来上がっていったゆえんである。それは当然、有明海の環境を大きく壊すものでもなく、だから漁業とも共存したのである。

しかし、何よりも干拓は、人々の食料生産と生活の場所の確保のために切羽詰まった必要からのものだった。だから、その完成はすべての人々の喜びだったはずだ。そのころの農家は、一株の稲でも多く植える土地が欲しかったのである。

翻って諫早湾干拓を見ると、まずその必然性がどれだけあったか。少なくとも農地を造るころには、国の農政は減反を強いており、農家は激減し、既存の美田が放棄田になろうとしていたのではないか。あれだけの国費を投じて広大な農地を造れば、大農経営がやりやすいのは当然だ。しかし、長年国民の食料を確保するため、地域の文化と国土を守るため、営々として農業を続けていた後背地の既存の農家との格差の大きさは黙視していいのか。

さらに、ギロチンといわれた工法は、あまりにも自然を無視した理不尽なものではなかったか。一つの湾を切り取るようなやり方が、現に宝の海をここまで壊してしまったのである。既存の海に「お世話になります」と、遠慮しつつ少しずつ海に出て行く謙虚さはどこにもなかった。それを指摘し、反対した人々の意見を無視した当時の政治の責任は重い。

今、長期開門に向け、漁業者と農業者の対立を報道で見るとき、無用な争いをつくりだした当時の為政者の罪はあまりにも大きいことを痛感する。彼らには、たったこれだけの干拓の歴史認識がなかったのだろうか。それとも何が何でもゼネコン型の公共事業がそれほどまでに必要だったのか。

今になって罰することはできないが、反省することはできる。そして、歴史的検証を行うことで、今後の取るべき方策は自ずと決まらるだろう。（無職）